プロリーが幻想入リーです・・・はい

スカイワッフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブロリーが幻想入りです・・・はい

【Nコード】

N7154W

【作者名】

スカイワツフル

【あらすじ】

伝説の超サイヤ人ブロリー。

悲しみや怒りなどの感情を破壊できしか表現できなかった男。

制御できない本能と破壊衝動の逝くままに生きた。故に貴方はこう呼ばれた悪魔と。そしてある日悪魔は太陽に突っ込み、死亡する。

そして彼はあの世へ

だがしかし！彼がいったあの世は『幻想郷』のあの世！

彼はその閻魔に『転生』を命じられ、幻想郷で第二の人生を過ごすことに

ブローリーの幻想入り小説です。
ほとんどギャグ、たまにシリアス入れる予定です。この小説のブローリーは紳士的です。多分。さらにあまり伝説の超サイヤ人にはなりません。いわゆる奥の手扱いです。
これらの要素が苦手なお方は、戻って帰れるとイイナア。
・・・はい

悪魔への裁き(前書き)

ブロリー「ブロリーです。今回は俺が幻想入りです」

悪魔への裁き

あるところに、最強という名にふさわしい悲しみの戦士がいた。
彼はある星の王国で生まれる。

生まれた彼の戦闘力が以上にまで高く、王は自分の邪魔になりかねないと見なす。

もちろん、父親は反対し王に助けてもらおうよう頼み込んだが

しかし――

「お前と一緒に死ねッ！」

父親は息子もろとも討ち捨てられた。

しかし、不幸中の幸い、だろうか

その星の爆発時、息子の潜在能力が発揮。

まだ幼く喋れないという子供だというのに、父親も匿うバリアーで、
空気のない宇宙でも活動する事ができた。

その後、息子はすすくと成長した――恐ろしいパワーを付けて。

そして――何年もの歳月が過ぎ――

彼は、父親も目的も何もかも、失ったのだ……

*

死んだ。

悲しみの戦士であり伝説のサイヤ人、ブロリーはそう悟った。死んだ筈だった。しかし、意識がある。

しかしさつきまで『伝説のサイヤ人』の状態だったが、今は通常のサイヤ人の姿になっていた。

そして自分は草原に倒れてる。そして傍に川があった。何故？そんな疑問が頭に浮かぶ。

—— いや、そんな疑問はどうでもよかった。

彼の頭に浮かんだ事は、それだけではなかった。

いや、死んだという事実よりも、重い真実が浮かんだから。

「カアカロツトオ……ッ」

そう、宿敵がない。

彼には宿敵がいた。しかし、自分は死んでいる。

ゆえに、闘うどころか会えることすらままならない。悔しさが募った。

スッ

「……………」

何かが目の前に現れた。

ブロリーはボケた様にポカーンとしてたが、

「……………へあっ!?!」

驚き、目を見開いた。

ようやくそれが生き物だという事に気がつく。

その者は、女性だった。赤身の髪を持ち、両側に分けて結んでいた。そして最大の特徴として、鎌を持っている。

彼女は疑問気な目でこちらを見ていた。

しかしどちらかと言うとブロリーが疑問気だった。

「あんた、何驚いてんのさ。と言うか、あんた幻想郷の住民じゃないね」

幻想郷？

ブロリーは頭が混乱する。

死んだ。けど、生きている。

しかも次は人と合い、さらには意味不明な単語を聞かされる。

そんな理解不能な表情のブロリーに、彼女は追い打ちをかける様に話かけてくる。

「まあいいさ。さあ、船にのりなよ」

笑顔で言い、川の方角を親指で指差す。

そこには川に浮かぶ、少しボロイ船があった。

ブロリーはもうどうしたらいいのか解らない。

寝ころんだまま混乱するブロリーに、彼女は「もう」と不機嫌そうな声をだす。

「そら、筋肉好青年さん！早くしなよ！」

「ぶ、ブロリーです…」

*

なんか強引に船に乗らされた。

強引過ぎて、一瞬『超サイヤ人』になる所だった。

しかし、なんだか…頭の整理がつかなかった。

そのせいで超サイヤ人になる事すらできなかった。

それより、自分以外にも船に乗せられた者も数人いた。

皆普通の人間に近い気が感じられた。少し違うが人間にもっとも近い。

しかし、彼女は違う。なんだか人間とは違う『何か』が感じられた。

『気』ではないが、『力がある』と言う事は解った。

しかし、自分には及ばないのも確かだと感じる。

「ん？なんだい、何か言いたそうな表情だけど？」

「…いや…なんでも」

短く答える。

彼女はおかしな者を見る様な顔になる。

「あんだ、本当に口数すくないねえ」

「……………」

ブロリーは黙りこむ。

何も返す言葉が考えつかなかったからだ。

彼女はフウ、と息を吐いた。

「ほんと、変な奴」

*

なんか雰囲気身を任せていたブロリー。
しかし、なんだか変な所に来てしまった。
そこは地球という裁判所の様な場所。

自分が大きな部屋の中心にいて、その前に少し立派な椅子とテーブルに座った豪そうな人物がいた。
偉そうでも、少女だ。
何やら小さい板を持っている。

「では、裁きを始めます」

裁き!?

ブロリーは驚く。

そして『裁き』という言葉に、何かをされると悟った。

バシユウウウンツ

ブロリーの髪が金色になり逆立った。

さっきまで黒かった目が、緑色の眼光を放っていた。

そう、彼は『超サイヤ人』になったのだ。

その気になれば『伝説の超サイヤ人』になれるが、まずは様子を見る事にする。

対する少女は少し反応し、ため息を吐いた。

「はぁ、あつちも余計な手違いをしてくれましたね…。おかげで苦
勞しそうです…」

なんだか皮肉を言っていた。

ブロリーにはイマイチ理解できない。

だからまず聞く事にした。

「お前に聞きたい事がある」

さつきまで静かだったブロリーだが、超サイヤ人になる事で性格も
変わり、口調も変わった。

「なんででしょうか？裁判中に私語は謹んでもらいていんですが」

「ここは何だ。そしてこれから何をするんだあ？」

「裁判ですよ。これから貴方の罪の重さを調べるんですよ」

彼は目を細めるが、すぐに笑う。

「はっはっはっはッ！この俺を裁けると思っているのか？」

「はぁ、もういいですか？裁判に戻りたいんです」

「いいだろう。聞いてやる」

少女はため息をついたが、真面目な表情になり、口を開く。

「貴方は激しく者を憎みすぎている。」

貴方の死因は異常な執着心とも言っている。その執着心が貴方を滅ぼした。

さらに貴方はある星を一つ破壊している」

「言いたい事はそれだけか？」

「いいえ

—— 貴方は、誰にも理解されずに生きてきました」

ッ！

ブロリーは目を細め、驚いた様な表情を浮かべた。

彼女の言葉には、説得力があつた。

いや、彼女の言った事は事実。

ブロリーは確かに、誰にも理解されなかった。

それどころか、父親には利用される始末だった。

そして彼は憎しみで全てを破壊して

「貴方は実に驚異的な力を持っていた。

その力ゆえ、親ともども討ち捨てられた。

さらにその力を利用され——ある銀河を破壊し尽くした。

理解者がいない、そんな孤独な日々を過ごし、本当の仲間がいない。

歪んだ執着心もそのせいでしょう。

貴方は本当は良い人格の筈です。しかし、運命が悪の道へと誘い込んだ」

ブロリーは思いつめた様な表情になる。

どこか、寂しげでもあり、喜劇な表情でもあった。

「……」

「同族には殺されかけ親にさえも見捨てられた。貴方はそんな悲しみや怒りなどの感情を破壊でしか表現できなかつた。

制御できない本能と破壊衝動の逝くままに生きた。故に貴方はこう呼ばれた悪魔と。

貴方は哀れな人物です。それも、自分ではどうにもできない。

しかし貴方の存在は悪ではなかつたとは言えない。

「……」

気づけば、ブロリーの姿は普通の『サイヤ人』に戻っていた。

その思いつめた表情に、少女は同情するような表情を向けた。

「さて、これは裁判が難しい所ですが、白黒はつきりつけさせてもらいますよ」

彼女は、数秒間目をつぶった。

静かに、何かを悟る様に、そして感じ取るように
そして――

「裁判の結果は『転生』です。執着心を捨て、もう一度『本当の貴方』として生きるのです」

ブロリーは、今何が起きているのかよく解らない。

ただ彼女の言葉を聞いているだけだった。

悟ろうにも彼の頭脳では無理だった。

意味が解らない。だが、一つだけ理解できた事はあった。

自分を認めてくれる者もいるんだな……と、

ふと、一瞬笑ってしまった。

今までにないくらいに、純粹に。

悪魔への裁き（後書き）

閻魔さん「では、貴方は幻想郷で暮らしてもらいます」

ブロリー「はい……」

閻魔さん「……あの、理解できてますか？」

ブロリー「幻想郷ってなんだあ？」

閻魔さん「それは次回のお楽しみですよ」

ブロリー「がっかりです……」

いざ幻想郷へ やる気のない伝説（前書き）

ブローリー「ブローリーです。ついに幻想入りです」

いざ幻想郷へ やる気のない伝説

ブロリーは死んだ。

しかし、ブロリーは何故か『幻想郷での裁判』を受ける事となる。

どうやら、あの世での手違いがあったらしく、幻想郷に来てしまっていた。

そして、そして幻想郷の閻魔に裁判された。

当の閻魔様は手違いでせいで、厄介の者が来た。と嫌み言っていたが、見事裁判に成功。

結果は『転生』である。

当のブロリーは、何が何だか理解はできなかったが、少し安心した気分になった。

*

「・・・・・・・・・・」

ブロリーは、幻想郷の閻魔に『転生』を命じられたブロリー。

なんやかんやで空気に身を任せた結果、幻想郷という地に行くように言われた。

あまり詳しい説明はされなかった。

だが説明されたとして、ブロリーに理解する事はできぬう！

しかし、彼はあまりそう言う事などどうでも良かった。

ちなみに、だが現在、普段のサイヤ人状態だ。

彼は幻想郷の東の端の端に位置する『博麗神社』に居た。

と言うより、強制的にここへ移動させられた。

「どっだぁ・・・」

そう呟く。

静かで低い声だった。

そして彼は気がついた。

「・・・・・・・・」

神社の階段から見た光景は、安らぎその物だった。
壮大な自然が広がっていた。一面、まるで理想郷。多すぎない建物
に数多い自然。

しばらく、彼はそんな光景ひ浸っていたが――

「・・・・・・・・へあッ!？」

自分の真後ろに何者かの気配が感じられた。
それはサイヤ人としての能力が働いたからだ。
彼は一瞬で後を向いた。
そこには――

「うわっ！いきなり大声出さないでほしいぜ！」

「・・・・・・・・だ、誰だぁ・・・？」

金髪で魔法使いみたいな格好をした少女がいた。
ブローリーは逆に戸惑った。

「おっと、他人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀だぜ」

「……ブロリーです……」

「私は霧雨魔理沙だぜ」

「……」

「黙るなよ、反応に困るだろ？」

少女——魔理沙は少し戸惑う。

魔理沙はまあいいや、と呟くところ続ける。

「何で神社に来てるんだ？……見た感じ、お前は外来人らしいな。見ない顔だし。」

彼女が言うには、この地にとっては外来人らしい。いわゆる、外から来た人。

ブロリーは身長2メートル以上ある。そして体格は筋肉質であり、しなやかな長い手足をしている。

顔も良い。イケメンだ。

こう言うレベルはまだ人間と呼べるだろう。

しかし、彼は人間ではない。サイヤ人だ。

そして彼はそのサイヤ人の中でも最強クラスのサイヤ人。

まあ、そんな事は見ただけでは魔理沙は理解できないだろう。

「……外来人……ってなんだあ？」

魔理沙はあく、と面倒臭そうな声を出す。

「そういう事は霊夢に聞くといいぜ」

「……………霊夢って誰だあ」

「この神社の巫女だぜ」

魔理沙がそう言った瞬間、神社の庭から誰かが出てきた。魔理沙はそっちを向き、少し笑った。

「噂をすればなんとやら、ってこの事か？」

そう、庭から出てきたのは博麗の巫女、博麗霊夢だった。

霊夢はブロリーを見るなりこう言う。

「あんたがブロリーね。閻魔から聞いてるわ。まず神社に入ってくるかしら？」

霊夢がブロリーに向かって手招きをする。

「……………」

黙ってついていった。

*

博麗神社の座敷だ。

それぞれ霊夢とブロリー + 魔理沙

が居る。

「……魔理沙がいる事にはつつこまないとして、ブロリー。あなたには幻想郷に置いて知ってもらおう事が山ほどあるわ」

「……………」

- 少女説明中 -

「というわけだあ！」

「親父イが黙る意思を見せなければ、このPODを破壊し尽くすだけだあ」

「やめるブロリー！落ち着けえ！」

「とっておきだあ……………」

デデーン

「これが本編だと思っているのか？」

*

霊夢の説明が終わった。

彼女はブロリーに、幻想郷の事、人外である種族、スペルカードなどについて話した。

「……………」

「あんた…………本当に理解してるの？」

「・・・はい」

彼女の説明が上手かったのか、ブローリーは理解できた様だ。と、言うより。普通なら驚いたりするのが上等の反応だ。

しかし、ブローリーは理解しても、そんな事はどうでもいい話だった。何せ、目的がないのだから。生きていくという事さえも目的の内に入っていない。今は――

「驚いたりするのが上等の反応な反応だぜ？」

魔理沙が言うが、

「・・・俺には、そんな事はどうでもいいことだ・・・」

いつもの低く大人しい声で言う。

霊夢と魔理沙は何かを言いたそうな顔になったが、その表情は呆れたようになりため息をついた。

「まあ、たまにはこういう反応の人もいるのね」

「なんか、落ち着き過ぎじゃないか？」

「・・・そんな事ない・・・。それより、出てっつていいかあ・・・？」

「え？、ええ。まあ、説明する事は全部説明したし・・・」

「じゃあな」

そう言ういい、神社の庭へと出ると――ズキュウウウン！

そのまま宙に浮き、かなりのスピードで何処かへと飛んで言った。

それを見ていた霊夢と魔理沙は――

「・・・あれ？あいつ外来人じゃなかったけ？」

「さ、さあ・・・。とと言うより、あいつって人間なの？外の世界には浮遊できる人間なんて一握りもない筈だけど・・・。」

驚愕していた。

いざ幻想郷へ やる気のない伝説（後書き）

ブロリー「ブロ（ry）今回はゲストの霊夢と魔理沙がいます……」

霊夢 「博麗霊夢よ」

魔理沙 「魔理沙だZ E」

ブロリー「二人は仲がいいのかあ……？」

霊夢 「良い分類なんじゃない？」

魔理沙 「ああ、いつもお茶を飲ませてもらってるぜ」

霊夢 「お賽銭を置いていつてほしいわね」

ブロリー「とつておきだあ……はい、？円です……」

霊夢 「できればもつと……って何この緑怪人！？」

？ 「ふん、化け物め。好きにしろ」

ブロリー「また一匹虫けらが死にに來たか」伝説化！

？ 「10円！」

ドカ、ダツダツダツダツダ

？ 「クソマア！」バキィッ

ブロリー「……おもしろくないです」シュウウウ 戻リーです

霊夢 「いや、あんたが勝手に出して飛ばしたんでしょ……」

魔理沙 「でも凄い戦闘だったぜ！瞬殺だったし」

ブロリー「もつと褒めてほしいなあ……」テレっ

紅い館 戦って和解 紳士のブローリー（前書き）

ブローリー「ブローリーです。紅い館に入ります」

紅い館 戦って和解 紳士のフロリー

「・・・・・・・・やることも・・・・・・・・何も無い・・・・・・・・」

フロリーは――― 適当に空を飛んでいた。

彼は本当にやる事がない。宿敵がいない――― それだけで、気力が失せる。

グウウウウ・・・・・・・・

「・・・・・・・・!!」

と、そんな空気を壊すかの如く、腹が鳴る。

フロリーは一瞬強張った顔になった。そして思ふ事はただ一つ。

「・・・・・・・・ご飯・・・・・・・・ですかぁ・・・・・・・・」

*

フロリーは食糧を探し求め、幻想郷を飛びまわる。

そして―――

「・・・・・・・・紅い、館か・・・・・・・・」

ブロリーは、大きな湖の近くにある紅い館を見つける。
ブロリーはこう考えた。

豪華そうな館〓大量の財産〓大量の食糧

「…………ふふ」

いつも無表情な彼だが、ほんの少し、笑った。

*

「……………」

「あ、あの、どちら様で？」

紅い館の門まで来たのだが、誰か居た。

「他人に名前を聞くときはまず自分から名乗るのが礼儀……………」

と、ついさつき会った魔理沙の言葉を適当に生かした。

「あ、しつれいしました！私は紅美鈴と言います！」

紅美鈴——この館の門番をしている妖怪だ。

「…………ブロリーです」

「ブロリーさんですね。解りました。それで…………何か様ですか
ブロリーさん」

「ご飯を食べたいです……………」

「……え？」

美鈴は一瞬、固まる。

紅魔館は基本的に関係者以外立ち入り禁止だ。その上、紅魔館に入ろうとする者自体あまりいない。

第一、入ろうとすると自らが迎え撃ち、中に入ればただでは済まないだろう。

しかし、彼は『ご飯を食べたい』というかなり異質な理由で入ろうとしている。

怖いもの知らず——いや、もしかしたらこの事を知らないのだろうか

「すみませんが……関係者以外立ち入り禁止なんです。お引き取りください」

「……なにい！」

いきなり、さつきまで無表情で大人しい彼の表情が、強張った顔になったが、すぐに元に戻る。

かと思っただけなんだか悲しそうな顔になった。

「え」と、とにかく無理です」

「……俺は腹が減りました……」

「ええええ……」

「……強行突破します」

ブロリーはそのまま、紅美鈴を無視してスタスタと涼しげに門をく

ぐりぬけようとする。

「そんなこといったって……ってちょっとおおお!? 人の話聞いてました!？」

「俺が……素直に聞くと……思っで、いたのか……?」

無視してスタスタと歩く。

(し、仕方がないですね……。ここは力づくで止めさせてもらいますよ! 見た目はかなり体格がいいですが……恐らく人間でしょう。楽勝です!)

彼女は、ブロリーの後ろで身を構え……

「はあああ!」

ブロリーに向かって拳を放った。

ドゴオッ

見事、ブロリーの背中を捕らえた。

妖怪である紅美鈴……力が人間よりも遥かに強い。たとえそれがどんなに力持ちの人間でもだ。

そのままブロリーに拳があたり、ブロリーは吹き飛ばされるだろう

—— 彼が人間なら

「……ッ!」

ブロリーはビクともしない。

吹き飛ばぶどころか、数センチも揺らいでいない。

即ち、サイヤ人の中でも最強クラスのブロリーにとっては妖怪の怪力などどうってことない。

ブロリーは数秒間止まるが、後を振り返った。

「なんなんだあ……今は……」

静かで低い声で言う。

何事も無かったように、無表情な顔だった。

「……ッ!」

彼女は反射的に振り返ったブロリーの顔面に2回目の拳を放つが

ガシッ!

彼女より素早く、拳を手のひらで受け止める。

「……そ、そんな……。貴方……人間じゃない……。化け物ですか!」

美鈴は、驚愕の表情でブロリーを見る。

ブロリーは相変わらず無表情。

「……俺が化け物……。?……。違う……。俺は悪魔だ……」

そう静かに吐き捨て、受け止めた美鈴の拳を離してあげた。

そして、何事も無かったかのように館の中へと入って言った。

「え？・・・あ、あの」

「・・・・・・・・・・」

反撃されなかった事が余程以外だったのか、思わず呼び止める。それに応じたのかブロリーは立ち止まり、再度振り返る。そして・・・

にこ

柔らかい笑顔を向けた

「————え!?!」

*

ブロリーは門をくぐりぬけ、館の扉をあける。

そしてブロリーの視界の飛び込んだのは、豪華な内装と驚いた妖精メイド達の顔だった。

メイド達が驚くのも無理も無い。

いきなり身長2メートル越しの長身男が入ってきたのだから。

「ブロリーです・・・・・・・・。何か食べさせてください・・・・・・・・」

と、無表情で言った。

だがしかし、メイド達は驚愕しており、動く気配もない。中には作業中で止まっている者もいた。

「…………無視ですかあ…………ふふっ」

と、笑った瞬間、何かギラギラと光る者が真っ直ぐに向かってくる。

「…………へあッ！」

驚いた声なのか掛け声か解らないが、張りの良い声を出した。それと同時に飛んできた物を回し蹴りで蹴り飛ばす。

ブロリーはわずかに強張った表情となり、バチッ、と彼の周りに緑の光が散らされた。

ブロリーは蹴り飛ばされ、地面に落下した粉々な物を見た。彼の蹴りでバラバラに砕けていたが、ナイフだと理解できた。

彼はナイフが飛んできた方向を見る。

「ッ————」

誰も居なかった。

だが——妖精メイド達とは違う気配をある方向から感じた。彼はそちらを睨めつける。

そこには、少女がいた。

白髪で目が紅い——メイドの様な格好をした少女。

「私のナイフを砕くなんて、かなりの実力者の様ね。私は十六夜咲夜。この館のメイド長よ」

「ブロリー……だ」

さっきとは違う、キツイ表情で言った。

「貴方達、ここは私に任せて、さっさと仕事を続行させなさい」

咲夜は、まわりでアタフタしていたメイド達にそう仕向ける。

メイド達は理解した。本当の意味は『ここから離れなさい』という事を。

メイド達は慌てて何処かへと行ってしまふ。

「で、門番まで破って、何のようかしら？早く用事を済ませたいんだけど」

「お腹が減りました」

少し表情を和らげて優しく言ったが、すぐにキツイ表情になった。それを見た彼女は

「あら、随分と移り変わりが早いのね」

「……」

「まあいいわ。今決めなさい。ここで今日の晩御飯になるか、さっさと立ち去るか……」

「……腹を満たすまで、俺は帰る事が……できぬう！」

「……それが貴方の答えね……じゃあ」

死になさい――

そう聞こえた瞬間、咲夜は消える。

それと同時に、全方向からナイフが襲い掛かってきた。

「ッ！――ウオオオオオオオ！」

そう咆哮を上げた瞬間、彼の体から緑色のオーラの様なものが放射線状に全方位へ散らされる。

衝撃派の様な物が巻き起こり、ナイフは吹き飛ばされてしまった。

「ッ――やるわね」

咲夜はそう言う。

「……俺もほんの少し本気を出そうか……」

「……あら？本気を出さなくて大丈夫かのかしら？」

彼女はそう言うが、実際には内心驚いていた。

あれだけの身のこなし、判断力、力。それでも本気ではない、ということに

そんな彼女を無視し、ブロリーは戦いに全力ではないが力を入れる事にする。

「……ッ！」

ブロリーの顔がさらに強張った。

彼女は少し焦った。

そして時を止め――ブロリーに向かって無数とも行っていい程のナイフを投げつけ――時を動かす。

ブロリーは突然現れた無数のナイフを見るが、ニヤリ、と笑って見せる。

彼の体を丸く覆う様に緑の光が出現する。

ガキイツ

その光に当たったナイフは砕け散った。

咲夜は一瞬で悟った。

「バ、バリア……ッ！」

「……デエヤア！」

ギユンッ

ブロリーは地面を蹴ったかと思うと、物凄い速さで飛行しながら拳を突き出し突進してきた。

咲夜は急いで時を止め、避ける。そして時を動かす――

ゴシヤアアツ！

ブロリーの拳は、館の壁をすんなり破壊してしまつ。

「す、すごいわね……」

ブロリーは外した、と悟ると咲夜を睨めつけた。

「貴方……手加減って物をしらないの!？」

ブロリーは手加減?とオウム返しをすると、高々と笑う。

「手加減はしてる。お前は本気を出す者にあたいしないのだ!」

咲夜は背筋に凍りつく様な感触を覚えた。

このまま戦っても体力を消耗するだけ。次で決めようと。

シュンツ!

咲夜は時を止め、ブロリーの背後に移動する。

そして時を動かし――

「これで、終わりよ!」

時を動かし始めたギリギリの時間でブロリーにナイフを逆手で突き刺す。

彼女はブロリーはナイフをバリアや衝撃派、攻撃などで防いでいた。だからそうされる前にナイフをブロリーの肉体に当てれば良いと考えたのだ。

しかし――

バキィツ

ナイフを突き刺すどころか折れてしまった。

「え……」

「ふふふ・・・ああッハッハッハッハ！」

咲夜が驚いてる間に、ブロリーは隙をついてそのしなやかに長く、筋肉質な手で彼女の頭を掴んだ。

「しまッ——」

彼女が言い終える前に、ブロリーは空いた片手で拳を構えた。

咲夜は時を止めて逃げようと試みるが——ガツチリと掴まれた頭は動かない。

そして——ブロリーの拳が放たれ——

彼女はとっさに目をつぶった。

そして——

「・・・・・・え？」

不意に、何も起きない。

恐る恐る目をあげると、拳は自分の目の前で止まっていた。そしてブロリーがそれを意図的にやったと気付いた時には、頭を掴んだ腕は離されていた。

「な、なんで・・・」

ブロリーは、姿を通常の『サイヤ人』に戻し、咲夜を見た。

「お腹が減りました。君を倒せば食べなくなります……」

低い声で、若干笑ってそう言った。

「えっと……」

彼女は反応に困ったのは言うまでもない。

本当に、性格の移り変わりの激しい悪魔だった。

「ご飯を下さい」

「ですが……」

「……下さい」

「しか」

「早く」

「……」

静寂がその場の空気を支配した。

話が續かない。言い返しても、状況が変わらなかった。

相変わらずブロリーは無表情。咲夜はさらに気まずくなる。

しかし、その場を破る救世主が現れる！

「一体何があつたの咲夜——あれ？」

「あっ、お嬢様!？」

「アッ!?!」

紅い館 戦って和解 紳士のブローリー（後書き）

ブローリー「ブローリーです。今回のゲストは美鈴と咲夜さんです」

美鈴「どうも！紅美鈴です！名前間違えないでね」

咲夜「十六夜咲夜よ」

ブローリー「君達は俺と闘ってどう思ったんだあ……」

美鈴「えっ、そ、そりゃ——強かったですね」

咲夜「貴方、何者なの？」

ブローリー「俺は悪魔です」

こあ「悪魔と聞いて駆けつけました！」

トランクス「嘘です！全て嘘です！ブローリーは悪魔じゃなくてサイヤ——」

ブローリー「ゲストが追加されました…小悪魔ですかあ…」

こあ「宜しく願います！」

咲夜「まさかの追加ね」

美鈴「まあ、人数は多い方が楽しいですからね！」

トランクス「アハッ」

パラガス「トランクス。心配する事はない。お 約 束だからな」

ちっこい悪魔 だが、悪魔は俺だあ！（前書き）

ブロリー「食べ物食べたいです……」

ちっこい悪魔 だが、悪魔は俺だあ！

「一体何があつたの咲夜—— あれ？」

「お嬢様！？」

「……………だれだあ？」

いくつかの扉の中の1つが開かれ、その中からは幼い蝙蝠の羽の様な物を生やす少女が出てきた。

ブロリーは静かに言うが、その小さい言葉を聞き取つたお嬢様なる人物はブロリーを見た。

そして怪我はしてないが服装の所々が痛んでいる咲夜。

次は粉々になつた無数のナイフ、壊れた部屋全体。

すこし険しい顔になり、少女はブロリーを再度見た。

「まさかこれ……………貴方がやつたの？」

「……………はい……………」

何ら反応を見せずに頷くブロリー。

少女はそんな彼に違和感を覚える。

「何しに来たの？」

「お腹が減つたんだあ……………」

少女は驚いた様な顔になる

その顔は何かを我慢する様な顔でもあった。

そして――

「ぷっ―― あっはっはっははははっ！」

笑いこけた。

「面白わね！で、そんな理由で館まで来て、こんな有り様にしたの？」

「何か悪いなあ？」

「ええ、凄く悪い事よ。こんな無茶な人は貴方が初めて」

だから――と少女は呟く。

「是非とも戦ってみたいわね。見た所、貴方は私には読めない『運命』を持っている」

ブローリーは少しだがピクリ、と反応した。

そして目を細めた。

運命、と聞いてだった。

もし、自分がこんな人生を歩んだのが全て運命のせいだったら――

――
生まれた環境、生きる事すら許されない、破壊でしか表現できない
自分――

「運命、かぁ……。だが、俺がこんな人生を辿った事、全て運命だとしたら……。俺は、運命を――

――破壊し尽くすだけだぁ!!」

ビュウウウウンツッ!

髪が逆立ち、眼光は緑に発光し、緑の光が散らされる。彼は超サイヤ人になった。

それをみた少女はニヤリと笑む。

「戦う意思を見せたわね……。貴方がどんな力を持っているのかは知らないけれど、私はそう簡単にはへばらないわよ?」

ブロリーはさっきとはまるで違う、切り裂くような微笑みを見せた。

「ああそうだな。お前がすぐへばらない様に手加減してやる……。せいぜい、俺の遊び相手になってもらおうかぁ!!」

ブロリーの高ぶる感情と伴って光がより強まった。

「へえ、随分と自分の強さに自信があるようね。見た感じ、貴方は人間じゃない……。でも妖怪でもないわ」

「は、ツハハハハッ！俺は悪魔だあ！」

「嘘つき。魔族でもないわ」

「……お喋りは此処までだあ。さっさと始めようか……
ッ。掛つてこい」

そう言い、彼は腕を差し出し、指でクイツつと挑発した。

少女はニヤツつと幼い顔に似合わない、悪魔の様な笑みを浮かべる。

「私はレミリア・スカーレット！この館の主であり吸血鬼！」

そう言い、少女——レミリアはブロリーに驚くべき速さで突っ込んで行く。

ブロリーはニヤリ、と笑い接近するレミリアを、無駄な動きをせず簡単に避ける。

「お前——中々速いな！流石は吸血鬼と褒めてやりたい所だあ！
だが、俺を倒す事はできぬう！」

そう言った瞬時に、彼の手から光が漏れる。

そして、腕をレミリアの方向へと突き出し——

バシユンッ

気弾が発射された。

レミリアは気弾を避ける。

そして気弾は屋敷の壁に当たり——
チユドオオオンッ、壁は

吹き飛ぶ。

彼女はブロリーを見た。

「へえ、弾幕も撃てるのね」「

「問う気も無いが、貴様等はスペルカードって言う物を使うらしいなあ」

「へえ、解ってるじゃない」

「スペルカードって言うのは『技』なんだろう？お前のスペルカードも是非見せてもらいたいものだあ！」

「ふうん、いいわ。見せてあげる、私のスペルをね」

彼女は腕を上げ、ブロリーを指差した。

「天罰『スターオブダビデ』！」

そう言った瞬時に、レミアを中心複数の紅い球体が現れる。

そして——ギョーンッ

その個々の球体から紅いレーザーと、青い光弾を複数ばら撒く。

普通なら避ける事が難しい技。弾幕勝負初心者なら一発でアウトだろう。

だがブロリーは——

「遅いな！」

彼は戦闘力が高い。サイヤ人自体戦闘力が高いが、その中でも最強とも言えよう彼にはどうってことはない

「やるわね、貴方。私の見込みはあっていたようだわ」

「スペルカードルールでは技を使う時、技名を名乗る必要があるらしいな……、俺もそのルールに則ってやるのか……」

そう言うと、ブロリーの右腕に緑色のエネルギーが集まる。

「喰らえ！『トラップシユーター』！」

光を投げつけた——そして彼の手から離れた瞬間、エネルギーが無数の光弾へと分裂する。

その無数の光弾は、恐ろしい速さでレミリアへと接近していった。

「かなり難しい技を出してくれるじゃない！」

レミリアはそう叫び、まるで忍者の様な動きで無数の光弾を避けた。

そして、避けられた光弾は屋敷の扉へ向かい——ドオオオオン、これまた破壊される。

レミリアはしばらく余裕な顔をしていたが——

「……えっ？」

遮断された日差し、扉を壊した事によって館内へと入ってきた。

それに気がついた彼女はすぐ、日差しから避けるように慌てて影へと向かった。

彼女は吸血鬼だ。強い半面、だから日差しを浴びると体が段々焦げてくると言う弱点もある。

だから日差しを避けるのだ。

「まったく、冷や冷やさせるわ……。このまま戦っても館が持たないわね……。すぐ片をつけよ」

ブロリーとの戦いを続行する為、ブロリーがいた方向を向く。そして、次に視界に飛び込んできたのは――

「心配するなあ……。もう勝負はついているからな！」

「ッ!？」

ブロリーの手のひらだった。しかも、光が散らされている。このまま気弾やら何やら喰らえばひとたまりもないだろう。

「勝負、あつたなあ」

「――私の負けね……。完全なる」

もうこの時点で、レミリアの負けは確定した。

*

「美味しいです……。」

ブロリー（元に戻った）は、レミリアとの勝負に勝った後、レミリアが折角だからと食事を出してくれた。

彼は妖精メイド達が出してくれる豪華な料理を食べているのだ。

かなりゆっくと大人しく食べている用に見える。しかし、かなりの速さで料理が無くなる。

「……食べ方にしては、料理の減り方が純情じゃないわね……」

少し遠くから見ていた咲夜はそれに淒く疑問をもっていた。

「もつとくれないかぁ……?」

料理を運んでいるメイドに頼む。

「えええッ、またですか!?!」

「……」

何かとシヨンボリした様な表情になる。

メイドはその顔に負けたのか、調理室に向かった。

「……さらに、摂取量も尋常じゃない……」

咲夜は本気で考えていた。

(だいたい、彼は人間なのかしら……?でも見た感じ、妖怪でも吸血鬼でも妖精でもなんでもない……)

しかし、あの戦闘力はこの幻想郷でもトップクラスに及ぶ強さ。人間にも見えない)

そう考えている間にも、ブローリーはもう来た料理を平らげる。

「ふう……満足だなぁ……」

そう言うと、ブロリーは立ち上がる。

「あら、帰るのかしら？」

咲夜が問いかけた。

「元々、食事をする為だけにここに来ただ．．．これといった用はもうない」

「あのね．．．ここはお店とは違つたのよ？」

「関係ない．．．」

（はあ．．．本当に、なんなのよこの人．．．）

*

ブロリーは館から出ていき、幻想郷上空を飛行している。特にやる事も無い彼。これからどうするかを考えていた。館に入る前までは、あまりこの郷に興味は無かったが、いざ弾幕勝負をしてみるとおもしろい物だった。

（．．．この幻想郷とかいう地——もしかしたらおもしろいかもしれないなあ．．．）

そう呟いた。

ちっこい悪魔 だが、悪魔は俺だあ！（後書き）

ブロリー「レミリアお嬢様です……」
れみりゃ「うー」

ブロリー「……あり？人違いかあ……？生首だ……」
れみりゃ「うーうー」

ブロリー「……」
れみりゃ「うー」
ブロリー「\かわいいノ」

パラガス「パラガス うー うー」
ブロリー「……でえやッ！」バキッ
パラガス「door!？」

れみりゃ「うー」
ブロリー「……ブロッコリーあげるYO」
れみりゃ「うー！！」

ブロリー「親父イも何かあげれば」
パラガス「よし、息子です。なんなりと」
ブロリー「親父イ……」

パラガス「勘違いするな……。それはお前をお婿にすると言っ
ー」
ブロリー「……れみりゃはペッドです」
パラガス「えゝえゝえゝえゝ！？」

戦いを求む伝説 (前書き)

ブロリー「闘う意思を見せなければ、俺はこの幻想郷を破壊しつくすだけだあ！」

戦いを求む伝説

ブロリーは弾幕ごっこに興味を抱き、戦いを求めて幻想郷を飛びまわっていた。

(・・・強そうな奴を探そうかぁ・・・)

彼は無の表情で周り幻想郷を探しまわっていた。

彼は強そうな者を探していた。

かれこれ4時間は飛びまわっていた。

そんなに時間が掛ったのは理由があった。何故なら——途中、天狗に取材させられたからだだった。

その天狗は速度が速く、ブロリーでさえ逃げるのに手間がかかった。その為、空は夕焼け。

彼はサイヤ人だ。強い相手を感じ取ったり、相手の力を感じる事ができる。

故に、彼はその能力を使い強い相手を探し当てようとした。

「・・・・・・・・そつちか・・・・・・・・」

彼は目を細め、その方向を見た。彼が見たのは下だ。

「でえいッ!」

ブロリーは一気に急降下する。

「ウオオオオオッ!」

だがそれだけでは留まらず、地面に風穴があいた。

そのまま掘り進み——ドゴオンッ

地下の空洞へとたどり着いた。

そして彼は下を見たが——かなり広い。

ここから地面までざっと、天と地くらいの差があった。さらに、何かと城下町の様になっている。

まさに地底界だった。

だが、彼は構わず地面へと急降下する。

ズドオオンッ、地面を抉りながらも軽々しく、カツコ良く着地したブロリー。

彼は周りを見渡した。

「……………ん？」

なにやら、そこら辺にいた住民らしき者がこちらを驚きの目でみていた。（何故かほとんど女性）

ブロリーは悟った。今日の前に居る者全てが人間でがないと。

そう、恐らく人間がいないこの場所だからこそ、彼が導かれたのだらう。

ブロリーはにやり、と爽やかに笑う。

「……………はははははっ」

だが、そう笑ったあと、引き裂くような笑みを浮かべた。

そして——

「フツッハッハッハッハ、ウワッハッハッハッハッハッハッ！」

口を大きく開き、高笑いした。

その笑い方には、さっきの笑い方とは違く、なにやら狂気まじりな笑い声。

「な、なによアンタ……?」

住民が問いかけてくる。

「ブロリー……だ。今からお前等は俺と弾幕勝負してもらいぞ……ッ!」

住民達は顔を見合わせた。

「あ、アンタまさか妖怪なのか?」

「俺が妖怪……? 違う。俺は悪魔だ……ッ! ハッハッハ……ッ」

「嘘突きなさい! 貴方はどうみても魔族ではないわ! かと言って妖怪でもない! 人間ね!?!」

ブロリーは、ククツ、と悪魔の様に笑う。

そして――

「俺が人間程最弱と思っているのか……?」

「じゃあなんなのよッ!」

「俺はサイヤ人だ」

「はあ?!」

「さあ、手加減してやる。せいぜい俺を楽しませる……」

ビュウウンッ

髪が青く発光し中途半端に逆立った。

この状態は半超サイヤ人。中途半端な超サイヤ人。

その気になれば、完璧な超サイヤ人にも、さらにそれを凌ぐ形態へとなれるが、彼は手加減するつもりなのだ。簡単に勝っても楽しくないからだ。

ざっと、周りにいる住民達はざっと10人位だ。

住民達は少し驚いたが、また顔を見合わせ、ぷっ、と笑う。

「あつはつはつは！この数を相手に、手加減するだなんて、なんて身の程知らずなのかしら？可哀そうだから、まずあたし一人から相手よ」

一人の住民がブロリーの前に立った。

ブロリーはその住民を、その高い背で見降ろしたor見下した。

「どっちが身の程しらずか————教えてやる……」

静かに笑う。

そして二人は一気に距離を取った

「こっちから行くわよ！炎符『火炎車』！」

彼女がそう言った瞬間。

・・・」

ブロリーはニヤリ、と笑うと。

「もうお前には興味がないな・・・。一瞬で片をつけてやる・・・」

住民は身を焦りながらも身を構え、守りを固める。
しかし――

シュンッ

一瞬にして、ブロリーはその場から消えた。

「ど、ど、ど・・・」

その場に居た者が驚いた時にはもう遅かった。

「まだまだ遅いぞ・・・」

「ふえ？」

後から声がした。

そして――

「ブラスターシエル！」

ドオオオオンッ

*

「もうだめよ……強すぎるもん……」

戦い、負けた住民の一人は不貞腐れる様に行った。

「折角手加減してやったのに……こんなに雑魚だったとはな……」

その他の住民達は、

「お、おい。こんな奴と弾幕ごっこすんのかよ……」

「絶対負けちゃうよ……あんなに強い奴、あたしたちが全員で掛っても勝てないもの！」

「もう駄目だぁ……おしまいだぁ……」

「そこまで性根が腐っていたとは……いいだろう、私が相手になつてやる！」

デデーン

「……こいつに勝てると思ってた私の姿はお笑いだったよ……」

「所詮、ムシケラといった所だぁ……。いくら雑魚が集まろうと無駄なのだ……！」

「ふん、次はどいつだ……」

「「「「無理です」「」」」」

声をそろえて言う。

「…………腰ぬけめ…………。しょうがないな。見逃してやろう」

「さ、流石男！女には優しいんだな」

なにかと調子に乗る住民。

「…………なんなんだあ、その態度は…………」

彼は右手を突き出し、気弾を撃つ準備のとりかかる。
それを見た住民は

「すみません調子に乘りました！」

「……………まったく…………」

そういい、彼は普段のサイヤ人の状態へと戻る。
そして後戻りしようと後を振り向くが

グウウウウウ

「……………お腹が減りました…………」

そう言うと、再び住民達の方を向き、

「…………食べ物くれる場所ってあるのかあ…………？」

「え？・・・ああ、あつちにあるよ」

「そつちかぁ・・・」

*

ブロリーは店に入る。

外の城下町の様なだけに、中も江戸時代っぽい。

サイヤ人であるブロリーに至っては、日本の文化など知る筈もない。そんな彼からすれば新鮮すぎる物だった。

「・・・本当に店なのか・・・」

「いらつしやいませ！」

店員と思われる者がカウンターにいる。しかも女性。

客席には少々の客。

ブロリーも薄々と気付いているが、なんかこの地に来て女しか見えない気がする。

しかし、人間の里の上を飛行していた時はちゃんと男がいた。

だが、妖怪などの人外に至っては何故か女ばかりな気が・・・

(なんで女しかいないんだぁ・・・。まあいいか)

彼は疑問を振り払いつつも、カウンター前の客席へと向かう。

「何にしますか？」

ブロリーはメニューを見る。

メニューにあるのは――

焼き鳥)・・・いやな予感がするなあ・・・やめておこう・・・

ご飯(カカロットの息子オ?)

味噌汁

焼き肉定食(上手そうだな・・・)

酒(・・・えっ?・・・俺、酒って飲んでいいのかあ・・・)

親父イ、生きてたら聞いてたんだが・・・なんか虚しくなってきた・・・)

彼は父、パラガスの事を思い出した。

パラガスは自分が殺してしまっている。だが、それは裏切られたから。そして利用されるだけ利用されたからでもあった。

あの時、彼は伝説の超サイヤ人の状態。自分でも制御できない事もある。そのせいで、勢いで殺した。

今考えれば――

「・・・親父い・・・」

だれにも聞こえないように呟いた。

「お客様、お酒ですよ」

不意に、店員が酒を差し出す。

「・・・?・・・俺は頼んでない・・・」

「いえ、あの方が」

店員が腕をその方向へ向ける。

「？」

ブロリーはその方向を向いた。

そこには、もちろん身長2メートルのブロリーには劣るが女性の中では背の大きい女性がいた。

しかも、1本の紅い角を生やしている。服装は体操服の様なTシャツに、すこし透けたスカートを履いていた。

おそらく鬼、という分類だろう。

ブロリーの視線に気がついたのか、あつちもこつちを向いた。

「ん？ああ、それおごつてあげるから」

彼女はそう返した。

「なんでだ……？」

「いや、なんか悲しい顔していたからね」

「……」

「……なにか言いたそうな顔だね……何があったかは問わないけど、まず飲みなよ」

「……俺は飲んでいいのか解らない」

「はは、言いに決まってるじゃないか」

「……」

「遠慮しないで飲みなよ」

ブロリーは渋々と、酒を口にする。

「……うまいのか解らない味だな」

「へえ、まさか初めてかい？お酒飲むの」

「ああ……」

「ふうん、そう言えばさ、君って人間なの？」

「……サイヤ人だ」

「サイヤじん？……聞いた事ないなあ？」

「……」

「まあ、そう黙るなよ。君って物静かだね」

「……お前は『本当の俺』を見た事がないからそう言えるだけ……
……本当の俺はじゃない……俺は悪魔だ」

彼は不意に腕を自分の目の前まで寄せた。

そして、ポワーン、っと緑の光が漏れた。

この行為は警告でもあった。自分の事に触れるな、と。

「……そっか。あんまり深入りしない事にするよ。人には触れられたくない過去があるものだしね」

「……………」

そういい、ブローリーは酒を飲み干した。

そして呟いた。

「親父い…………あの世で、元気にしてるかあ……………」

あの世からの偽りの自分（前書き）

ブローリー「NEEYは血祭りにおめげてる…ッー」

あの世からの偽りの自分

「親父イ……あのよで元気にしてるか……」

ブロリーは、そう呟いた。

*

ある世界のあの世の地獄

ここは、地獄だ。

だが、地獄とは世界ごとに違う地獄がある。故に幻想郷の地獄ではない。

「……ブロリーなのか？……」

「ガアアアアアア……」

地獄のある場所に、片目に傷があり、戦闘服の上に白い布をかぶったすこし老いた男がいた。

彼はブロリーの父親、パラガス。

ブロリーを育て続けた張本人。そして、利用し見捨てようとした張本人でもあった。

だが、彼は後悔していた。あの世に来て、そう思い返した。

そしてその前にいるのは……

ドロドロな液体を被った化け物がいた。身長はブロリーと同じくらいである。

目は紅く、心臓がむき出しになっている。まさに化け物だった。その化け物はバイオブロリー。ブロリーのクローン。

培養液を被ったせいで体がドロドロに溶かされ、原型が残っているのは後ろ髪だけ。

そんな見た目だが、パラガスは解った。

これはブロリーと似た様な気を感じる。サイヤ人の本能がそう伝える。

だが、それはブロリーではないとも伝えている。

「違うのか……？いや、気の質はブロリーと酷似しているが……気がブロリーより低い……」

パラガスはそう言う。

「ウワワアガアアアアッ！」

バイオブロリーは、問答無用でパラガスに襲い掛かる。

「しまった!！」

しゅわつとッ!

パラガスはぎりぎり、上に飛行し回避する。

「くそあ……アイツの実力はブロリーに劣るが、凶暴さは上の様だな!！」

「ウヴァアアアアアアッ!！」

バイオブローリは全速力でパラガスの元へと向かった。

「くっ、もうダメか……ッ！」

パラガスは目をつぶったが――

ギューイイイイイイインッ

突然、光が漏れ始めた。

何処から発せられているのかは解らないが、とにかく強い光。

「な、なんだこれは！」

その瞬間、パラガスとバイオブローリはその場から消えた。

*

その頃、幻想郷にてブローリは

ブローリは、地下……旧都から出てたばかりであった。
あたりは夜。

月が辺りを照らしていた。

そしてブローリは、止まる場所を探していた。

今は人の里、という場所に行こうとしている。宿屋くらいあるだろうと思ったからだった。

現在、空を飛行していた。

「……ん？」

突然、胸や腕、足の到る所にはめ込んである真珠が光り始めた。

「————これは……………」

彼は感じ取った。

自分に何者かが語りかけてきていると言う事に————そしてそれは自分と似た存在。強さこそは違うが、何か自分の気と共通点を感じられた。

そして、次の瞬間———— キュウイイイインッ

光が溢れだした。

そして———— その中から

化け物が現れた。

「……………な、なんだお前は……………ッ！」

「ヴアアアアア……………」

その化け物はまるでドロドロとした液体のような者を纏っており、心臓などがむき出しになった化け物———— それはバイオプロリ―だった。

「……………お前……………俺か？」

彼は共感できた。

自分と似た様な気質をもっているのはこいつの事だった。

「ヴアアアアアアアアアアアア！」

飛びかかってきた。

ブロリーは、スツツと避ける。

「スピードは……俺以下のような」

だが油断できない。

どんな強さを秘めているのか知れた事ではない。自分と似た気質を
持っているのなら尚更。

ギユウウンツ

ブロリーは、超サイヤ人状態となる。

髪が金色になり逆立つ。そして眼光が緑になる。

「でえいやッ！」

全力で突っ込み、全力のパンチを喰らわす。

「ウオオオオツ」

化け物がよるめく。

「死ねい！」

それに追い打ちをかけるように、後に瞬間移動し、キックを喰らわせる。

「グウウウツ、ウガアアアアアアツ！」

キックを喰らわせるが、よろめいた反動で後を向き、あっちも拳を放つ。

「何———ぐあああアツ！」

ブロリーは吹き飛ばされる。

吹き飛ばされながらも態勢を立て直す。

「ヴアアアアアアツ！」

バイオブロリーは気弾を放ってくる。

「でえい！」

それに対抗し、ブロリーも気弾を放った。

バシユンツ、気弾同士ぶつかる。

そして、1秒もしない内にブロリーの気弾が押し、バイオブロリーへと向かっていく。

「グアアアアアアツ！」

それはバイオブロリーに直撃する。

それを見たブロリーは鼻で笑った。

「ふん、どうやら気の使い方は俺の方が上手い様だな。取り柄はパワーだけ……その程度の実力では俺を倒す事はできぬう！」

ブオオオオンッ

金色の気がブロリーから大量に放出された。その金色の気は実力の差を見せつけるようでもあった。

「グガアアア・・・ッ」

バイオブロリーは背を向け、逃げようとする。

「させるか！消える！」

彼の右腕から緑光が出現。それはやがて、大きな球体となる。ブロリーはそれをバイオブロリーへと投げつけた。

それは恐るべき速さでもう一人の自分へと向かい。

「ブラスターシエル！」

「グアアアアアアッ！」

直撃する。

バイオブロリーは力尽き、そのまま森へと落下していった。

「・・・終わったな、所詮、クズはクズなのだ。はは、ツハツハツハツハツハ！ウワツハツハツハツハツハツハツ！」

あの世からの偽りの自分（後書き）

ブロリー「ドロリーの強さについては作者の適当設定です…」

ドロリー「ヴアアア（これで終わりだと思っなよ）」

パラガス「なんて事だ…。能天気で足手まといな息子が増えた…」

ブドロ「デエエイツ！」

パラガス「DOOR！」

＼デーンノ

ベジータ「もうだめだあ…おしまいだあ…」

？円 「奴等を倒さなければこの宇宙は終わりだ！」

パンツ 「あんな奴を生かしておいたら、宇宙は破壊し尽くされてしまう！」

孫悟空 「奴をこのまま生かしておく訳にはいけねえ！」

ブロリー「血祭りにあげてやる」

ドロリー「ヴアアアアッ！」

一同「ぎゃあああああああああああああああああッ！」

幻想郷に泊ろう 親父イとの再会（前書き）

パラガス「パラガスでございます」

ベジータ「パラガス！出しゃばるんじゃない…」

ブロリー「お前がな」

ふおおッ、キイイイン ドゴオオオン

幻想郷に泊ろう 親父イとの再会

ポオオオオオオンツ

幻想郷の森に、何かが墜落した。

「ウウ……カ、アアア……」

バイオブローリ。

彼は空中にてブローリの気弾によって撃ち落とされた。
そして、現在に至る。

「アア……ガアアアアアアアアッ！」

バイオブローリは怒り狂う。

理性がない彼の頭の中は、ブローリへの復讐一色となった。
彼は空へ舞い上がり、ブローリを探そうと飛び去って行った。

ブローリは人間の里へと来ていた。

泊る場所を探すためだ。

この地に住むと言う事になれば当然住む場所も必要となるだろう。
恐らく、人里だから宿屋くらいあるだろう………と思っていた
のか？ではなく思っていた。

現在は夜。と言っても夕方と夜の間。

月が微妙に出ている微妙な時間帯。

人里には人が出歩いてしたが、身長2メートル以上でイケメン、そして変わった服装のブロリーを珍しげに見ていた。

「何かと注目されているな……それより、宿泊場が先だぁ……」

適当に当たってみる事にした。

そこらへんの住民に話かける。

「ここら辺に宿は無いか……?」

「う、うわっ、背でかい……。って、あ、宿屋?」

「……うむ」

「じ、ここら辺には——いや、宿はないけれど、止めてくれる所はあるかもしれませんよ?」

「そうかぁ……。で、心当たりはないのか」

「えっと……。うーん……。あ、寺小屋とかは?」

「……。寺小屋ってなんだぁ……」

「あそこにある、少し大きい家ですよ」

「あれか……」

*

こうして、ブロリーは寺小屋の前に来た。
そして、ドゴドゴツ、と少々強めに門をノックする。

「……………反応がないな……………」

ブロリーはすぐに痺れを切らし、門を破壊しようとする。
と、拳を振りかざした瞬間

「一体なんの——うわ！」

「…………ツ！」

突然門が開かれる。

ブロリーはぎりぎりですべて拳を止める事ができた。
門から出て来たのは少女。頭に変わった帽子の様な物を被っている。

「い、いきなり殴ろうとするなんて、何を考えてるんだ?!」

「…………早く出てこないお前が悪いです……………」

無表情で言う。

「いや、早く出たつもりだよ。そこらへんの礼儀は重んじている」

「……………それよりも用があつてきた……………」

「何?」

「宿泊ってできるのかぁ・・・？」

「————宿泊？」

「あぁ」

「うむ・・・ただ泊めるってのは少し抵抗があるんだが・・・」

「

「・・・」

「うちは寺子屋だから、何かしら手伝ってくれんならいいぞ？」

「手伝いかぁ・・・面倒くさいな・・・」

「そこら辺は君の自由だ」

「・・・」

「と言うと、条件を飲むって形でいいか？」

「あぁ」

「そうか、まぁ入りなよ」

*

「ここが君の部屋。丁度空いてる部屋があったから」

「変わった部屋だな・・・」

彼が連れられたのは、普通の庶民風の部屋。

だが、ブロリーにとっては珍しい部屋。何せ、地球で暮らした事自体あまりない。

1時期、7年間居たがその時は氷漬けにされていた。

「自己紹介してなかったな。私は上白沢慧音。この寺子屋の教師をやっている」

「……俺はブロリーです」

「ブロリー？変わった名前だな」

「……そうかあ？」

「君は外来人かい？みた感じ、変わった容姿をしてるし……」

ブロリーの容姿

身長2メートル超えて、上半身裸でチャンピオンベルトのような金色のベルトと、その下に赤いものを腰に巻くように付け、白い胴着を下半身に着ている。

首にはベルトに似た首飾りを下げ、手首にはベルトとデザインが同じ長めのブレスレットを装着。靴とベルトのデザインがほぼ同じ。

そしてイケメン

「そう言う事になる……かもしれない。詳しい事は話す気もない……」

重苦しく言う。

そんな彼の様子に慧音は目を細める。

「何かしら事情がありそうだな」

そう呟く。

「・・・それよりも、手伝って何をするんだあ・・・？」

泊まる条件を思い出したブロリーはさっそく聞いた。

「まあ、簡単に言えば事業の準備を手伝ってほしい」

「準備か。それだけか・・・？」

「うーん、後、休み時間とかに子供達に構うくらいかな？」

「子供か・・・」

ブロリーは子供と聞き、以前戦った二人の子供を思い出した。その時に戦ったせいかわ、子供に構うと聞くと戦いの事しか思い出せない自分が何かと悔しいブロリーであった。

「他に聞きたい事は？」

「ない・・・」

「それじゃ、ごゆっくり」

そう言い、慧音は部屋を出ていく。

「・・・やる事がないな・・・」

宿泊先が決まったものの、まだ眠いと言つ訳でもない。
彼は何かやる事を見つける事にした。

「夜の散歩でもいくか……」

そう言い、部屋を出た。

*

外に出たブローリー。
もう夜になっていた。辺りに並ぶ家の1つ1つの明かりが、夜道を照らしていた。

「……素通りです……」

適当に歩きだす。

ダツダツダツダツダ

「……ん？」

だれかがこつちに走ってくる音がする。

「……敵か？」

明らかにこつちに向かって来ている音。
次第に音が大きくなってきている。

「誰だ……」

ブロリーは身構えた。
もしかしたら、敵かもしれない。しかも夜だ。暗い所をつけ狙う輩もいる。

そして――

「ブロリー！」

来た！ ブロリーはそう悟る。
後からだ。

ブロリーはとつさに後に回し蹴りをした。
バキッ、直撃する。

「DOORッ!？」

叫び声がした。なんか聞き覚えがある気がするが、あまり気にしない。

どうやらヒットしたようだ。ブロリーは得意げな表情で、その者を見た。

が、ブロリーは驚愕した。

「ヘアッ!？親父い!？」

そう、目の前に居たのは地面に倒れた自分の父親パラガスであった。

「な、なんで親父が……死んだ筈じゃ……」

瞬時に疑問がたくさん生まれた。

「ぶ、ブロリー、一体、どうしたと言っんだ、何故俺を……ま、まさか」

残念そうな顔になり、そうか、と呟く。

「無理も無いか……。お前を操り、その拳が見捨てたのは張本人はこの俺なのだから……」

「お、親父イ……」

「すまん！」

ガバツ、つと倒れたまま頭を下げた。

「これまでの事をすべて謝る！俺がお前にした、数々の仕打ち……全てに対して反省している！」

「親父イ……頭を上げろ……」

ブロリーはパラガスの肩に手を置く。

「許してくれとは言わないが……いままで済まなかった……」

「親父イ……どうでもいいからそんな事より」

「……！……！……！……！……！……」

シュワツト頭を上げ、ブロリーを見た。

なんでこんな軽く流すんだ！？とそう叫ぶ。

「どろちゃって生き返ったんだ？」

「そ、それは――あの世で化け物と戦っていたら――ここに居たのだ」

「……は？化け物ってなんだあ……」

「ドロドロした化け物だぞ」

ドロドロした化け物――ブロリーには見覚えがある。
数時間前に気弾で撃ち落とした者。

「……そうかあ、あの化け物はあの世から来たと言う事になるなあ……」

「お前のあの化け物にあったのか？」

「……はい……」

「そうか……――と言うよりも、ここはどこだ！」

「幻想郷だ……」

「幻想郷……ま、まさか……！」

パラガスは驚愕する。

ブロリーはそんな親父に疑問を抱いた。

「知ってるのかあ？」

「ああ、知ってるとも。かなり前の事だ。地球に帝国を築き上げる為に事前に地球の事を科学者に調査させた時に知ったのだ。詳しい事は探れなかったが、たしか妖怪とか言う化け物が住んでいると聞いた」

「……だいたいあってる」

「む、まさかブロリー。妖怪とあったのか?!」

「はい……」

「そうか……。では本当に幻想郷なのだな……。ん、待てよ、住む所は確保してるのか？」

「はい……」

「そうか……。流石俺の息子だ。俺と似て下準備は欠かさないんだな。はあっはっはっは!」

「全然似てないです。俺の方が上です……」

「~~え~~~~え~~~~え~~~~え~~~~え~~!?!?そんな事があるう筈はございません。この私より頭が劣るブロリーが、この私以上など……」

「なんなんだあ、その態度はあ……?」

「シュワットツ!お助け下さい!」

「……できぬう!」

「あああっはっはっは、あああっはっはっはあああ……」(泣)

デデーン

*

寺小屋では――

「夕食の準備は終わりつと……。ん？」

ガラガラ、扉が開かれる音がする。

「ブロリーか？確か出ていった筈……。帰って来たのか」

そう言い、慧音は玄関まで行った。

そして、慧音は驚く。

「ぶ、ブロリー。その傷だらけの人は……」

「親父イです」

「ブロリーに八つ裂きにされたパラガスでございます……」

ブロリーに八つ裂きにされたパラガスは無理矢理、涼しげに言う。
体のあちこちに傷がある。

だが、無理矢理だけに顔が引きつり、その痛さが伝わってくる。

「ブロリーの父……。本当に父親？似てないと言うか……。だ
けど変わった服装と言う事は共通してる……」

「……似てるなどと、その気になっていた俺の姿はお笑いだったぜ……。ふぁぁっはっはっはは……。…」

何やら泣きそうに言うパラガス。

さっき、自分の息子に言われたばかりなのに——— こんどは他人から言われるとは……。パラガスは非常に悲しくなってくる。しまった、っと慧音は慌てだした。

「す、すまん、気に触ったか？」

「その様な事が有ろう筈がございません。慣れっこだからなあ……」

パラガスは強がりを言った。

ブロリーは無表情だが、プツっと一瞬笑った様な気がする。

「慧音。親父イも泊まらせるがいいか？」

「ブロリーと同じ部屋ならいいが」

「解った……。親父イ。こっちだあ」

「……では、ゆっくりさせてもらおうとしよう。ありがたく思うぞ」

と、パラガスはせめてもの礼儀で慧音にお辞儀する。

「親父イ……」

「？」

「一人用のポッド」

「やめろおおおお」

幻想郷に泊ろう 親父イとの再会（後書き）

ブロリー「作者めえッ！投票が遅いです…」

作者「やめろおお！お助けください！お助けおお…」

ブロリー「クスがあ…」

作者「事情があつたんです！学校とか期末テストやら――」
ならず者「反抗する気か！」

？円「そこまで性根が腐っていたとは…」

ベジータ「馬鹿な作者め…」

パンツ「根拠もない言い訳を言いやがって」

孫悟空「それよりオラ腹減っちゃまったあ、へッへッへッへｗｗ」

タコ「コンピュータのはじき出したデータによりますと作者は
壊れておりますじゃｗｗｗｗわへへｗｗ」

ブロリー「ここがお前の死に場所ダァ！」

デデーン

作者「自分はあ、ブロリーの手によって手厚く葬られました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7154w/>

ブロリーが幻想入りです・・・はい

2011年11月10日02時13分発行